

平成30年度 前期日程 小論文「論述（長文理解）」 出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

潮木守一『キャンパスの生態誌—大学とは何だろう』（中公新書、1986年）から出題した。大学教育における「自由」について、ウェーバーやナチスの例をあげて展開される本文は、筆者の語る論旨を正確に理解する能力が求められる。日頃から論説的な文体に慣れ親しむことが必要であり、その読解力を真正面から問う問題である。また、設問を正確かつ慎重に理解し、分かりやすい文体で解答する作文の技量も問うている。

本文で述べられる「自由」には、「アカデミック・フリーダム」と「価値判断からの自由」の二つがあることを読解すべきであるが、これは設問1の問題文によっても容易に気付くことができる。しかし、それゆえに設問1は、それ以上の理解を解答者に求めており、単に異なる自由が二つ「存在する」ことを示しただけでは不十分である。解答者は、これらの自由について正しく読み取れていることを、採点者に示すだけの作文技量が求められており、その「長所と短所」も限られた文字数のなかで説明しなければならない。

さらに設問1に答えるためには、本文の構造を完全に理解し、キーワードを含めた概念整理が明快になっている必要がある。そのうえで設問が「何」を求めているかを正確に読み取り、それに適した解答を用意しなくてはならない。

設問2も、問題が「何」を求めているのかを、はっきりと認識したうえで解答する必要がある。問われたことになんともなく答えているという程度の書き方では、問いに正しく解答していることにはならない。この設問が、「筆者の危惧とは何か」「それがなぜ起こりうるのか」、そして「その回避方法についての解答者の見解」の三点を問うているのだから、解答者はこの三点についてそれぞれ明快に答えるべきである。問われたことのいずれについて解答をしているのかが分からないような書き方であってはならない。

【解答の傾向】

本文の文意や構造を理解した者と、まるきり誤読した者とはっきり分かれる傾向にあった。設問に対して適切に答えている者と、設問の問いを軽んじた解答をしている者との違いも明瞭であった。本文の文脈を読み取れていたとしても、設問に対して的外れな解答をしていると思われるものが多かったからである。なぜ設問文を注意深く読んだうえで解答しないのか、たいへんに不可解である。本文と設問のどちらも正しく理解していたとしても、それを採点者に伝えられるだけの文章力がないと思われる解答も見られた。作文力によって差が生じたわけである。このように本年度の解答は、はっきりと点差がつく傾向にあった。

解答文は、意味の通る文章にしてこそ解答となりうるのに、採点者が文意を読み取れない解答も多く見られた。論理的な文章を記すときは、一語の誤りでも意味が逆転することがありうるのだから、安易な言葉づかいをしてはならない。言葉を慎重に用いて、論理的な文章を書く訓練を積むべきである。

本文の主旨は、大学におけるアカデミック・フリーダムを批判し、そこに惹きつけられる学生に警鐘を鳴らすことである。そして筆者が危惧しているのは、大学が「政治的調教の場と化す」ことである。しかし、解答のなかには、本文中の「心理的圧迫」「いやがらせ」といった文言に触発されたのか、本文の主旨を「いじめ問題」と解釈したり、教員と学生の単なる「コミュニケーション問題」と解釈するものが頻出した。

解答者自身の考えを述べるところでは、本文の主旨から大きくかけ離れて、飛躍した見解をひたすら述べる解答が散見され、さらにどこでどう間違えたのか、論旨が全く逆転してしまい、ウェーバーや筆者が批判しているアカデミック・フリーダムを、筆者が肯定しているかのように記して、これを推奨する解答まであった。また、本文の論旨に違えているとまで言えなくても、「学校のいじめ問題」や「教員が若者の気持ちを理解しない」といった解答にとどまるものがすこぶる多く、全体的に凡庸な印象をぬぐえなかった。創造性を発揮して説得的な文章を完成するには、試験時間が足りなかったかもしれない。しかし、一方で本文の主旨を確実にふまえたうえで、自身の考えを見事に論述した解答もあり、そこでは大いに点差が開くことになった。